

風の便り (第93号)

発行日:平成 19 年9月

発行者:三浦 清一郎

試論 人間とは何か?・教育論の背景

1 「人間観」は「教育観」を決定する

第79回大山移動フォーラムの幼児教育論を執筆する中で何度か参考書の論理の曖昧さにつかりました。曖昧さとは、証拠がないのにそうなる筈であると助言しているような場合です。このような教育論の曖昧さの裏側を突き詰めて行くと、教育論の前提となっている人間観が曖昧だということに気づかされます。「人間観」は「教育観」を決定しているのです。

例えば、『子どもと対話し、子どもの見目を繊細に詳細に誘導する』とか、『なぜと考えてわかることを大事にする保育者の姿勢が探究心を支える』とか、『子どもへの共感に包まれた厳しさ』が大切である^(*)というような情緒的にして曖昧、抽象的にして多様な解釈が可能な助言がどのような役に立つと言うのでしょうか? 幼稚園や保育所の子どもに理解できる筈のないことを理解できるように想定して指導法を助言するの

はただ混乱を招くだけです。子どもの現実には矛盾にも、運の悪さにも、不公平にも満ちているのに、言葉による教師の誘導が、あたかも子どもの生き方を変えることができるかのような錯覚に立って教育を論じている参考書もあります。

指導の原理は簡単明瞭かつ具体的でなければ人々の役には立たないのです。「子どもとの対話」も、「子どもへの共感」も大事であることは否定できませんが、なにが“適切な”対話で、どうしたら“正しい”共感をもつことが出来るかすら、人それぞれの解釈でバラバラに分かれてしまうではないですか!? 言葉による説明で子どもの態度変容が運良く出来る場合もあれば、出来ない場合もあるでしょう。態度変容がいつまで続くか、続かないかも千差万別でしょう。その時の子どもの態度は様々な要因に規定されている筈です。

- 1 ● 試論 人間とは何か?～教育論の背景・・・ P 1
- 2 ● 小学校教育の変革・・・ P 7
- 3 ● 団塊世代よ、あつまれ!!・・・ P 10
- 4 ● Message To and From・・・ P 12
- 5 ● 編集後記 しつけの原点・・・ P 13
- 6 ● 第 79 回生涯学習フォーラム in 大山 (鳥取) お知らせ・・・ P 14

例えば、その時の子どもはどの程度習慣付けられているのか？意味と説明を理解する言語能力は習得できているのか？過去の体験を通して自身の知識や行為をどの程度確認しているか？変動要因となり得る条件を挙げれば切りがありません。

しつけがなっていない多くの現代っ子を見

2 限りなくゼロに近い乳児

子どもは自分のことが自分で出来ないところから出発します。自分のことも自分で決められないところから出発します。教え込んで、やらせてみなければ出来るようにはならないことは自明でしょう。しつけも教育も、限りなくゼロに近い乳児から出発せざるを得ないのです。だからこそ親は「保護者」と呼ばれるのです。子どもの人生は、何も出来ない、何も分からないところから出発するのです。このような人間観に立てば、教育は基本的に「教え」・「育てる」という「他動詞」になります。子どもには、「為すべきこと」をあるいは教え、あるいは励まし、あるいは強制し、あるいは評価して「体得」させて行くのです。しつけは、生き方を枠にはめ、型にはめ、習慣化するところから始まります。人間はヒト科の動物として出発しているからです。ヒトは最初から人間として登場するのではない、と理解すれば、自ずと指導法が変わります。教育を論じることとは畢竟人間を論じることになることに気がかざるを得ないのです。

子どもの主体性や子どもの理解力を指導の前提にすることは、いかにも判断が「甘く」、時には間違っているのです。『何度言ったら

れば、保護者や教師による言語を用いた行動指導を子どもが理解し得るという前提はほとんど間違っているとしか考えられません。どのような理屈をこねようと、しつけが身に付いていず、規範が内面化されていない子どもこそが現代の最大の問題ではないのでしょうか！？

分かるの！？—何度言ってもわからないのが子ども』です^(*)2)、という観察が筆者の見解に近いのです。「半人前」の立ち居振る舞いは、子どもが行為の意味を理解しようとしまいと指導者が反復練習を通して教え込み、植え付けてこそ根付いて行くのです。幼児の言語理解力を前提に指導することなどほとんど不可能なのです。この時、『子どもへの共感に包まれた厳しさ』が大切である、などという表現を見るとその情緒性と曖昧さに呆れます。

教育論の背景には論者の人間観が反映せざるを得ないということです。それゆえ、筆者も人間の特性をどう捉え、その性情をどう理解しているかを整理する必要があると考えました。特に、幼少年教育や高齢者教育には人間の動物的要素と社会的要素が大きく関係せざるを得ないからです。以下はフォーラム論文の前提となる試論です。

*1 本吉圓子(事例)、武藤 隆(解説)、生きる力の基礎を育む保育の実践、萌文書林、2004

*2 汐見稔幸、子育てにとっても大切な27のヒント、双葉社、2006、p.27

3 人間は霊長類ヒト科の動物として出発する

～『クスリやめますか、それとも人間やめますか！？』～

人間は霊長類ヒト科の動物として社会に登場し、時に不幸にして、霊長類ヒト科の動物として生を終ります。それゆえ、教育の最大の任務は「ヒト科の動物」を人間にし、ひとたび人間になった人々を「ヒト科の動物」に退行させないことです。高齢者について、『時に不幸にして』というのは、極度の認知症や「植物人間」の患者として生きなければならない場合を想定しています。

かつて麻薬防止のキャンペーンポスターに『クスリやめますか、それとも人間やめますか！？』と書いてあったことを思い出します。麻薬による中毒症状が極限に至れば、「廃人」となり、しつけや教育によって身に付けた「判断力」も、「選択能力」も、「自己制御力」も失うことになります。ポスターはその状況を『人間やめますか！？』と表現したのです。このメッセージを裏返せば、人間の証明は精神の働きだということになります。「判断力」と「選択能力」と「自己制御力」を失えば人間の基幹部分を失うということです。「廃人」とは「人間を廃する」と言う意味ですから、廃人になればすでに「ヒト」であっても、「人間」でないということを意味します。

こうした考え方を人間の発達過程に置き換えれば、乳幼児にも、極度の認知症患者にも、植物人間と化した患者にも当然人間としての証明力は希薄だということです。それゆえ、乳幼児には全力を上げて、言葉や社会の規範を教えます。しつけや教育による「社会化」の過程がそれです。翻って、高齢

者に対してはこれまた、全力をあげて人間の条件を失わないよう、言葉や社会生活のトレーニングを導入して「認知症予防」に取り組みます。かくして、乳幼児は教育によって、ヒト科の動物から人間に成長して行きます。また、高齢者に対しては教育的補強によって、獲得した社会的能力を失って、ヒト科の動物に退行することのないよう教育的予防措置を講じるのです。現象的には、教育に失敗すれば、両者とも社会的な「ききわけ」がなくなります。そこからヒトであっても「いまだ人間になっていない」という思いや、人間でありながら、「人間をやめてしまった」という感覚が産まれるのです。



乳幼児には近い将来確実に人間として成長する希望があります。しかし、極度の認知症患者には今のところ成長の希望がありません。乳幼児に対する虐待もありますが、相対的に認知症患者に対する虐待が多くなる根源的理由は、ここに存していると考えます。植物人間患者を巡って安楽死の議論が起こるのも同様の理由ではないでしょうか？

要するに、教育の背景には「ヒト科の動物」を「人間」にする任務と、「人間」を「ヒト科の動物」に退行させないという任務があるの

です。人間になるためにも、人間を続けるためにも教育は不可欠の要素です。人間の社会化、人間の発達には自然発生的には起こらないということです。人間は「なる」のではなく、

人間に「する」のであるという根拠は、「ヒト科の動物」から出発するという人間観にあるのです。

4 誰も代わりには生きられない ～「人の痛いのなら3年でも辛抱できる」～

教育にとって一番の困難点は人間の「個性性」です。存在の「個性性」とは誰も代わりにも生きられないということです。すなわち、痛みも、悲しみも、喜びも、満足も、誰も他者とは代われない、ということです。存在を分断された個体が喜怒哀楽を共有しあうことはまず不可能です。他者の身になって初めて想像することが可能ですが、問題は「他者の身になる」ことが極端に難しいということです。生来優しい人は稀にいます。そういう人々の「感情移入」の能力は特別の能力です。世界中至る所で人が弾圧されていても、飢え死にしているにもかかわらず私たちは平気で生きているではないですか？人間の個性性を人権学習とか平和学習とか机上の空論で乗り越えることは到底出来ないのです。日本人の知恵はこのことを一言で言い表しました。「人の痛いのなら3年でも辛抱できる」という言霊がそれです。悪くいえば、他者の不幸に対する我々の無関心の原点がここににあります。人権学習や平和学習の流行のまっただ中で子どものいじめもまた大流行しているではないですか！良くいえば、時代や世の中がどんなに不幸に満ちていても人間は無関心でいられます。自分が中心で、自分を律することさえ出来れば生きて行けるということです。頭でっかちの教室の学習でいじめられる相手の身になって考えることなどできっこないので

す。学校の人間観、戦後教師の人間観が誠に曖昧で、甘いのです。

言語や知識はある程度まで共有が可能ですが、喜怒哀楽の情や人間の意志を他者と共有することは大変困難です。人生経験の薄い子どもではまず無理と言って過言ではないでしょう。他者の身になって、それぞれの認識や心理的な距離を小さくするためには少なくとも似たような体験を経る以外に方法がないのです。教育における体験が重要なのはそのためです。また、言語や知識はある程度まで共通化し、客観化することが可能ですが、当人の技能や行動や納得は特定の個体が会得することになります。特定の個体が会得したものを、言語だけで別の個体に説明することは極めて困難です。技能につきものの「コツ」一つをとっても、言語による共通化や客観化は困難です。「やってみなければわからない」のはそのためです。ここに「体得」の重要性があります。「身にしみた」という後悔も、「腑に落ちた」と納得することも、「身に付いた」という自信も、脳を通した言語上の理解を超えています。上記の理解は体験を通して心身の機能の全体が理解したということです。「理解」と言うよりは「体得」と言った方が正確でしょう。「身体に教える」という言い方や「身をもって知る」という言い方は「体験体得」した、と言い換えていいでしょ

う。

家庭教育も学校教育も、現状はあまりにも言語に依存した指導に傾いています。特に、幼少年期の教育は実際にやってみて全身全霊で理解させ、しかも分かったことを反復して「体得」にまで高めることが肝心です。教育界が道德教育から社会科の授業まで、「体験」を重視するようになったのは、ようやく「体得」しない子どもはなにごとにも出来ないことを自覚したからです。「命の大切さ」でも、「いじめられる側の身になる」ということも、基本的に言語で教えることは難しいのです。実習を伴わない教育は、教える側も教えられる側も、

多大の時間とエネルギーを浪費します。学校が言語に過剰に依存して、「頭でっかち」になったのは「誰も代わりにはいきられない」という人間の個性性を忘れていているからです。指導主事の任命条件に病院や消防学校の体験実習を義務づけてはどうでしょうか？少しは「介護」や「汗」の意味を理解し、「発問」や「板書」や教材研究など机上の「指導案」にこだわった小手先の指導が減少するのではないのでしょうか？その時初めて、情緒的で、抽象的な美辞麗句に満ちた空疎な学校の研究発表会が修正されるでしょう。

5 欲求の固まり

人間は欲求の固まりです。自己抑制の教育に失敗すれば、子どもは欲求至上主義になり、共同生活の秩序は崩壊します。どのよう分類しようと人間の欲求は無限であり、そのエネルギー源は欲求から発し、しかも資源は有限です。無限の欲求で有限の資源を奪い合えば秩序は直ちに崩壊するでしょう。

マズローの幸福論は、「生理的欲求または生存の欲求」から始まって、「安全の欲求」、「愛情または帰属の欲求」、「社会的承認の欲求または尊敬の欲求」、最後は「自己実現の欲求」に満たされて行くとしています。マズローは欲求の順序性を指摘して大いに注目されましたが、ここでもまた、幸福の条件がすべて「欲求」を満たすことであることに注目すべきです。人間の幸福は欲求の充足に存するという事です。しかし、マズローがどこまで自覚していたかは分かりませんが、人間の欲求の対象は有限です。社会という共同

生活の中で、自分だけの欲求を追求すれば、かならずどこかで他者の欲求と衝突します。ホッブスのいわゆる「万人の万人に対する戦い」が始まらざるを得ません。ルールも契約も無秩序な欲求の衝突を避けるために生まれたということに納得せざるを得ません。教育が規範の確立を強調するのはそのためです。

駅でも、レストランでも、公民館でも、図書館でも、公共の場で、しつけの出来ない悪ガキの「やりたい放題」の振る舞いは、まさにしつけの出来た犬にも劣ります。「やりたい放題」は「欲求の命ずるまま」という意味です。しつけの出来た犬は己の欲求をコントロールして飼い主の意志を実行しています。悪ガキとは規範が身に付いていない子どものことです。悪ガキの定義は社会が必要とする「欲求の自己抑制」のしつけができていないということです。然るに、しつけや教育の第一任務

は「欲求の自己コントロール」を教えることです。端的に言えば、教育機関から刑務所まで最終の達成目標は「ルール」の社会的強制にあります。「欲求のコントロール」こそが秩序を維持する基本だからです。裏返せば、人間は欲求の固まりだということです。

乳幼児の段階で、言って聞かせても、人並みに欲求の自己抑制が出来ない場合には、

保護者や教師のような第3者がコントロールしなければなりません。それゆえ、しつけにも教育にも、叱責、懲罰、強制によるコントロール、説得や奨励による自己抑制力の育成が不可欠なのです。しつけ糸で止めて、「型」を教える、ということは「欲求の自己抑制」力を体得させることと同じ意味なのです。

6 人間性は変わらない

最後の人間観察の結論は、人間性は変わらない、ということです。藤沢周平の時代小説が現代の我々の生き方に重なって多くの人の感動を呼ぶということは、どの時代も人は同じような喜怒哀楽の中で生きたということを物語っているのです。

上記の3～5の3点は筆者が想定している人間の特性です。人間性と呼んでも同じです。それらの人間性は変わらない、と言うのが第4の特性です。人間性が変わらない以上、教育の原点も変わる筈はないのです。

昔から人間はヒト科の動物として出発し、その子に関わる多くの人々の社会化の努力がその子を人間にしてきました。昔から人間は「個体」として存在してきました。昔から他者の代わりには生きることが出来ないのです。それゆえ、昔も今も、教育における体験が大事なものは何も変わらないのです。『やったことのないことは身に付かない』ことは昔も今も同じです。それを忘れたのは教育界の油断であり、あほらしさです。

人間が「欲求の固まり」であったこともまた同じです。したがって、共同生活における「欲求の自制」が重要であることも同じです。

個性の時代だからと言って、子どもに「他者の迷惑」を教え、己の欲求を「我慢すること」をしつけない教育などは考えられないのです。「耐性」の重要性を忘れたから、「辛さに耐えて丈夫に育てる」という先人の教訓が分からないのです。半人前の時代の修養や鍛錬の大切さを忘れた現代の親も、現代の学校もなんたるアホでしょうか！！

人間性が変わらないとすれば、戦前の教育にも、江戸時代の教育にも、さらにその前の時代の教育にも歴史がすくいあげて来た教育の知恵がたくさん残っている筈ではないですか！戦前の教育や子育てを全否定して始まった戦後教育が多くの間違いを含まざるを得なかったのは当然だったのです。戦後教育は日本の風土が培ったたくさんの知恵をぼろを捨てるかのように捨て去ったのです。捨ててはならぬものまで捨て去ったのです。これからの幼児教育論はそれらを拾い集めて、もう一度吟味し直し、子どもの発達段階に沿って、しつけの中身と指導の順序性を確かめて行かねばならないのです。

★★小学校教育の変革★★

11月18日(日)飯塚市立八木山小学校第1回研究発表会

ごあんない—公開発表会です。学校にご通知の上、ご自由にご参加ください。

1 変革の試み

今年こそと思いながら小学校教育の変革に参画しています。変革の対象は「子ども観」であり、そこから派生する「指導観」であり、「学校観」であり、具体的な指導方法です。したがって、教師の役割意識も、地域との関係も、家庭との関係も変わらなければなりません。その過程では研究プロジェクトのあり方も、戦後教育を主導して来た諸概念の見直しも修正も不可欠です。

当然、あらゆる改革に戦後60年の蓄積と惰性は頑強に抵抗します。昨年のおさやかな改革実践の試みが挫折したのはそのためです。教育の変革には膨大なエネルギーが必要です。学校教育の変革はその最たるものです。多くの教員は変革に立ち向かう前向きなエネルギーを有してはいません。仕事が増えるのはごめんだ！という感情はあらゆる変革提案に抵抗します。また、自己の正当性もあらゆる変化に抵抗します。自分たちはプロで、自分たちが正しく、これまで慣れ親しんだやり方でいいんだと思えば、変革の必要

は感じないわけです。世間が放置し、教育行政が黙認して来た、学校と教員の閉鎖性は、筆者のような外部からの提案や助言を干渉と受け取り、頑強に抵抗します。

子どもがここまで「へなへな」になった今日、学校の変革は時代の課題ですが、一気に変えることは不可能であり、全面的に変えることも不可能です。しかし、どの領域にも優れた意欲的な人々は必ずいます。

幸い今年も意欲的な校長先生とそのチームに巡り会うことが出来ました。不十分ながらもめざした変革は着実に進んでいます。11月の発表会はその成果を世間に問う最初の試みになりました。果たして子どもは変容したでしょうか？何が変わり、変容はどの程度までなし得たか？果たして地域や家庭の評価はいただけるか？教育行政はモデルの意味を理解し得るか？課題は山積しています。

協力してくださっているのは福岡県飯塚市立八木山小学校です。発表会は子どもの接遇実践から始めます。当日の受付は 8:20 からです。9月以降、先生方があいさつ・作法の型を鍛えた子どもたちが来訪者をお迎えます。果たして「のびのび育児」の風潮の中で、やりたい放題に野放しにされて来た現代っ子の接遇・歓迎はみなさまの評価に耐え得るでしょうか！？変革の第1課題は「なる」から「する」へ、です。子どもが「学ぶ」から、子どもに「教える」への方向転換です。核心は「教えること」の復権です。

したがって、当然、教師集団を学校の中心に置きました。それゆえ、「何が出来なかったのか？」という診断と、「何を出来るようにしたのか？」という処方箋の効果が問われます。指導の過程で「どのようなプログラムで？」、「どう指導したのか？」も問われます。

教師が中心であると宣言する以上、成果の責任を子どもの生育歴や家庭の教育努力に負わせることは許されません。教師は指導のプロであり、結果の責任は教師が負わなければならないのです。今までの学校はこの指導責任の原点を確認していません。その分だけ言い訳と逃げ口上が多いのは当然の結果です。

筆者が想定している発表会の特性は以下の諸点にまとめることが出来ます。

(1) 全教員の参画による指導方針及び指導過程の発表と役割分担

子ども達の「before」と「after」を比較し、何のために、何を、どのように指導したか、を報告します。

(2) 体力と耐性を基本とした少年期の鍛錬成果の披露

「へなへな」の子どもが少なくとも集団に適応し、激しい運動に耐えて行きます。身体表現はきちんと「できること」と「美しいこと」の両方が問われます。果たして彼らはみなさまの鑑賞に耐え得るでしょうか？

(3) 学習活動における地域との協働成果の発表

目標は「伝承」と「創造」です。教えていただいたことに猛練習を積み上げて新しい命を吹き込もうと努力しました。地域のみなさんのお顔に注目しております。

(4) 子どもの「潜在能力」を前提とした記憶の「負荷」の成果を発表

子どもは見事に教材を覚え切ります。その吸収力は驚異的です。この時期を逃さず基本知識・基本教養を詰め込んでやるのは「教育の親切」と呼ぶべきでしょう。発表会に成功したあとの子ども達の飛躍にご期待ください。

(5) 教育論でもなく、努力論でもなく、子どもの変容によって問う発表会

子どもが変われば、教育方法も変わります。家庭のしつけも変わるでしょう。結果的に親も変わるのです。「親が変われば子どもが変わる」は原理的には正しいのですが、「子どもが変われば親が変わる」もまた正しいのです。親を変えることはできないでしょうが、子

どもを変えることは十分可能なのです。それゆえ、発表プログラムは3点に絞りこみました。

第1発表は縦集団を組織して行った「郷土学習プログラム」です。地域に伝わる獅子舞とすもう甚句を披露します。本歌の指導は地域の方々をお願いしましたが、歌も演技も身に付くまで反復練習して仕込んだのは先生方です。

第2発表は全力疾走の「身体表現プログラム」です。体力や反応速度、集団行動の正確さを追求しました。学習の持続と努力の集中を支える基礎は「体力」と「耐性」だからです。集団行動は人間だけに与えられた後天的な学習の成果です。見ていただきたいのは社会的行動耐性と呼んでいいでしょう。1年生から6年生まで、体力も、耐性も、体験も、舞台度胸も異なる全学年児童が、一糸乱れず、息も切らせず、強烈なリズムで全力疾走する「南中ソーラン節」を無事演じ抜きましたら、どうぞ、万雷の拍手をお願いします！！『南中ソーラン節』で鍛え上げた「行動耐性」こそが、後日、必ず「見える学力」に邁進する基礎力を形成します。

第3発表は「江戸・京都いろはかるた」の朗唱プログラムを選びました。カルタは合計102種類あります。子どもの「潜在能力」を引き出すため、子どもの記憶指導に意図的に「負荷」をかけています。伝統的な「素読」、「暗唱」は、戦後教育の中で、長く「つめこみ」として拒否され、子どもの自主性、主体性、あるいは個性、創造性に敵対する元凶として否定されて来ました。本当に「詰め込み」は創造性の敵だったでしょうか！？「詰め込み」を拒否して、「主体性」は育ったでしょうか！？

成長期の有用な知識をつめこんで、縮こまってしまう「個性」や「創造性」であれば、なんとちやちなものだったでしょうか！反対に、人生に不可欠なものを、人生で唯一可能な幼少年期に「つめこんでもらえなかった」子どもの不幸は誰が責任を取るのでしょうか！？戦後日本の指導法の最大の誤りは、半人前の子どもの「主体性」や「欲求」と引き換えに、生活文化の基礎・基本を「詰め込む」ことに失敗したことです。

それゆえ、今回の実践研究の暗唱教材はいろはかるただけに限定しませんでした。ご家庭の協力もいただいて保護者にも聞いていただくお願いをしました。

全校発表の朗唱は発声法が試され、リズムが問われ、チームワークが不可欠です。朗唱の発表は身体表現の集団行動と基本は変わらないのです。もちろん、東北大学、川島隆太教授が証明した脳の活性化、知的作業の準備運動の意義を前提としていることは言うまでもありません。

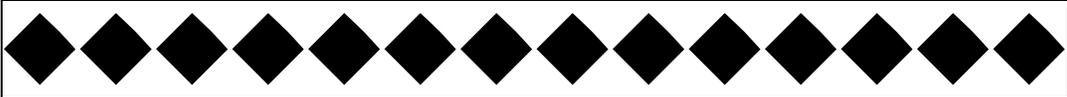
お問い合わせ：飯塚市立八木山小学校
(教頭 高橋浩一)

〒820-0047 飯塚市八木山693-1

TEL 0948-22-2951

FAX 0948-22-2938



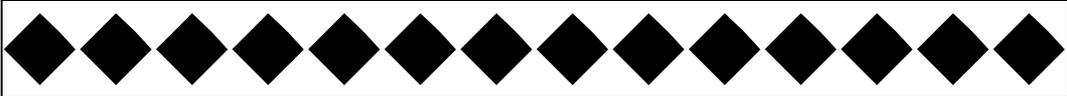


団塊の世代よ、あつまれ！！

(下関市社会福祉協議会事業)

『お元気だから活動する』ではありません。

『活動するからお元気なのです』



高齢社会の参考書を開くと定年者に対する助言が並んでいます。助言の主流は、『無理をしてはならない』、『目標に拘ってはならない』、『マイペースで暮らさない』、『いい加減でいいのです』、『出来る範囲でいいのです』、『楽しいことを見つけなさい』というようなものです。冗談ではありません！！

これらの助言は過剰な「負荷」をかけてはいけない、という趣旨なのでしょうが、上記の表現では「負荷」そのものを否定することになります。「負荷のない生活」を始めれば、熟年者は一気に老いぼれます。

定年後の無為は人間の心身の機能を必然的に低下させるからです。生理学者ルーの指摘にある通り、使われない機能は一気に衰退することが生物のメカニズムだからです。

また、生涯学習や高齢者福祉が唱導する定年後の「安楽」を求めるプログラムは、「安楽」を求めるが故に、「負荷」が少なく、世間の承認や評価も得難いことは明らかです。ストレス・フリー、「負荷ゼロ」の生活は確実に人間をダ

メにします。「負荷」が少なければ、がんばる必要はなく、がんばることを止めれば心身の機能は低下の一途を辿ることでしょう。それでなくとも「老い」とは「衰弱と死に向って降下すること」なのです。

生き甲斐ややり甲斐についても、世間は、世間を賑わし、世間に貢献することのない人々に拍手は送りません。社会的承認が得られなければ、孤独と孤立はやがて不可避になります。趣味や楽しみを追ってもその日暮らしは出来るでしょうが、社会に扶養されて、「安楽」を追い求めるその日暮らしを続けていけば、周りの「厄介者」になるのは時間の問題でしょう。作家藤沢周平が隠居人を『世の無用人』と言ったのはまさに至言だったのです。

あたらしい活動を始めなければ定年鬱病の発生は当然であり、生き甲斐を喪失することも必然です。

下関市の「高齢社会を良くする女性の会」の田中隆子会長はこのことを実に良く理解し、社会福祉協議会の関係者を説得して来年の1月19日(土)に

標記の研修会を開催するところまで漕ぎ着けました。事業そのものは昨年の続きですが、今年の眼目はお集まりになった熟年世代のみなさんを下関の諸団体が、あたかも大学の新生歓迎・クラブオリエンテーションのように“いっしょにやりませんか？”、“どうぞ我がクラブにご参加ください”との勧誘活動と組み合わせたことです。いわば、定年後の『活動お見合いの会』を同時開催することになったのです。

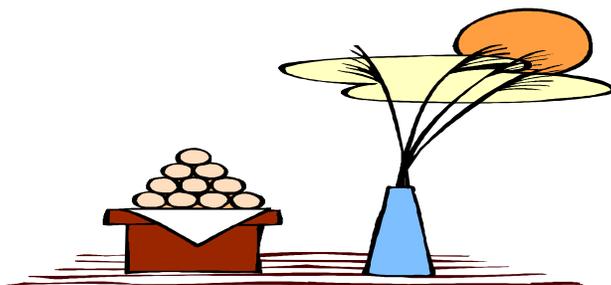
これから田中さんと関係者はプログラムのチラシをもって地区内の企業を廻るという意気込みです。果たして、企業の人事部や総務部は退職後の職員の健康や生き甲斐まで心配してくれるでしょうか？興味津々で見守っています。

学校支援ボランティアの候補生として、小学校の中で自身を鍛え始めた飯塚市の「熟年学び塾」が如何に画期的なことであるかについてはすでに報告いたしました。「学び塾」のみなさんと並んで、下関にお集りの熟年世代がどのような活動を始め、どのような効果を上

げるか、高齢社会の活力を維持する試行錯誤が始まります。

熟年が活力を失えば、高齢社会の活力は必然的に低下するでしょう。処方方は簡単です。子どもにがんばりなさい、と言って励ますように、熟年者にもがんばりなさいと言わなければなりません。子どもに努力が必要なように、熟年者も努力が必要です。子どもが目標を持って学ぶように、熟年者も目標を持って行き続けることが活力の秘訣です。老若男女「生きる力」の構成要因も、「生きる力」を鍛えるトレーニングの順序も同じです。「体力」から始まって、「耐性」、「学力」、「社会性」、最後に「やさしさ」や「おもいやり」のようなEQ（人間関係能力）に至る修養のシーケンスは変わりません。来年1月19日（土）、下関市社会福祉協議会が主催する『団塊の世代よ、あつまれ！』にご注目ください。

註 期日：2008.1.19（土）、場所：下関市社会福祉会館、担当：竹本篤史
Tel.0832-32-2003 Fax.0832-32-1522



MESSAGE TO AND FROM



お便りありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

● 広島県立生涯学習センター 海坊主 殿

センターのメールマガジンの巻頭言はまさに名文のモデルです。簡潔明瞭でウィットにとみ、リズム感に溢れ、季節感に満ち、毎回読むのが楽しみです。どうすればあのような文体になり得るかと感服しております。教育分野の情緒的で、曖昧な文章に食傷した時は、あなたの文章に帰ることがあります。今後とも健筆をお祈り申し上げます。

● 福岡県筑紫野市 山本奈美 様

今日から福岡県人ですね。梶山さんになるのですね。山口の次の同窓会は1月20日(日)です。会場は周南市になる予定です。近くなったのでまた一緒に何かを企画しましょう。イラストや絵本の制作も諦めないで続けてください。ご活躍を祈ります。

● 福岡県朝倉市 遠藤秀雄 様

思いがけない再会で感激でした。企業を守って日々戦っている生涯現役はさすがに強いですね。お見事です。見習ってがんばります。学校の評議員もなさっていると校長先生からお聞きました。ここでも共通のつながりがあります。今回八木山小学校の研究発表会について書きました。準備が整いましたら改めてご案内申し上げます。

● 山口県下関市 竹本篤史 様

リーダー研修会の成果はすべて実践につながり、田中さんの熱意と下関市社会福祉協議会の決断が一つの形になりました。2日間のご支援ありがとうございました。今回、「団塊世代」についての取り組みの理念を紹介してみました。近々に当日のプログラム試案をお送りします。田中さんが参加者を募るため企業周りをすると張り切っておられました。企業の関係者、既存の団体の関係者がどのような反応を示すか興味があります。あなたにとっても新しい実験でしょうが、私にとっても熟年の活動の仲人役は初めての挑戦です。変わらぬご支援をお願いします。

● 福岡県篠栗町 久野玄仁 様

やりましたね！30人31脚の地区優勝おめでとうございます。「寺子屋4か条の心得」が全く別の場所で生きていることを「豊津寺子屋」のみなさんに報告しておきます。10/27はテレビを拝見するつもりです。お知らせありがとうございました。全国大会でのご健闘を祈ります。



● しつけの原点 ●

10/7(日)に実施する鳥取県大山町での第79回移動フォーラムに提出する幼児教育についての論文資料を読み進めている途中で、思い立って小さなパーティーを主催しました。数人のお客様をお招きしたカジュアルで簡単な月見の宴です。

お客様がお出でになった時に気になるのは飼い犬のカイザーです。彼は寝ても、覚めても、散歩の時も、執筆の時も、筆者の犬の仲好しですが、めったに他所の人になつきません。時には、毛を逆立てて吠えまくるので、ほとんど困り果てます。その日も何とかおとなしくするようしつけようとしたのですが、最初の10分ぐらいはなかなかうまく行きません。そうした努力の途中で気がついたことがあります。

今回参考にした育児書や幼児教育の参考書の大部分はしつけの目的を子ども自身の成長にしています。例えば、「子どもの可能性を伸ばす」^{(*)1}とか、「子どもの危機に立ち向かい、『子どもにとって最前の利益』を保障する」^{(*)2}とか、「親とともに乗り越える問題行動」^{(*)3}というようにしつけの第一目標を子ども自身のためとしているものが多いのです。

しかし、カイザーのしつけは、原理的に本人(?)のためよりはお客様(他者)のためです。「お客様(他者)に迷惑をかけぬように」、「お客様と楽しく過ごせるように」しつけるのです。犬と子ども

と一緒にすると、また、おしかりを受けるかもしれませんが、筆者が問うているのは原理の問題です。犬のしつけと子どものしつけとその目的原理に違いがあるでしょうか!?カイザーと同じく、子どものしつけも、第一義的には、「他者」のために行うものではなかったでしょうか?「他者に迷惑をかけない」ことが第一目標であれば、「やるべきこと」も、「やってはならないこと」も明確になります。家庭のしつけが社会を意識することになります。子どもに甘い、いい加減な妥協は許されない筈です。しつけが結果的に、本人の成長を助けることになることは疑いないとしても、日本の家庭教育(多くの保育所や幼稚園教育にも当てはまるだろうと思われませんが…)は肝心の目的の順位を勘違いしてこなかったでしょうか?

しつけも教育も広く人間の「社会化」とよばれます。社会化は、ヒト科の動物を社会人にして行く過程と考えていいでしょう。社会化と言う以上、その機能は当然社会の存在を前提としています。それゆえ、「社会化」は、共同生活を前提とし、当人のためよりは、むしろ、他者のために行うのです。極論を恐れずに言えば、しつけも規範の教育も共同生活において他者に迷惑をかけないために行う予防措置の一つです。当人に引きつけていえば、社会において他者と気持ちよく暮らすための事前準備と言っていいでしょう。

当然、カイザーのしつけは人間との共同生活

